

実践報告

専門職養成大学における歴史教育実践について(1)

江連 崇*

名寄市立大学保健福祉部社会福祉学科

キーワード：歴史教育、専門職養成、地域史

1. はじめに

本稿では筆者が行った専門職養成大学における歴史教育実践について報告する。筆者は2016年4月から学内に自主勉強会として「名寄市立大学歴史研究会」を発足させ学生と共に活動を行っている。活動内容としては、大学所在地である名寄市や近隣市町村の近現代史をテーマにし文献講読やフィールドワーク、聞き取り調査などを行っている。この取り組みは今後も継続していくが、中間報告として2016年度の活動、学生の反応について記述していく。

2. 歴史研究会設立の背景と大学における歴史教育

まず研究会の活動について記述する前に現在日本の大学における歴史教育がどのような状況に置かれているのか、いくつかの文献からみていきたい。

近年、大学における歴史教育の在り方について議論されることが増えてきている。大学において歴史教育の機会は大きく2つに分けることができる。それは「専門領域における歴史」を学ぶこと、そして「一般教養としての歴史」を学ぶことである。「専門領域における歴史」については、専門職養成大学において一昔前までは多く見られた。例えば社会福祉学専攻においては社会福祉の歴史を学ぶ「社会福祉史論」や「社会福祉発達史」と呼ばれる科目が存在した。しかし「専門領域における歴史」について筆者の所属する社会福祉学科においては「社会福祉史論」として1年生科目として開講しているが、全国的に開講数が減少傾向にある。社会福祉の歴史を学問対象とした学会「社会事業史学会」において「社会福祉歴史教育に関する小委員会」が2004年に発足し、その調査結果において社会福祉専門教育機関における歴史教育の機会の減少を指摘している(第4次社会福祉歴史教育委員会 2014:153)。

「一般教養としての歴史」については複数の学科、学部による共通科目の1つとして開講される「歴史学」を示す。この「一般教養としての歴史」については小学校、中学校、高校の社会科としての歴史が「暗記科目」となってしまう傾向がある中「歴史を学ぶこと」についてもう一度学びなおすよう一部の教育研究者により積極的な歴史教育実践が行われている¹⁾。

ここに挙げた「専門領域における歴史」と「一般教養としての歴史」双方に共通する点としては、その機会の減少が挙げられる。本稿で紹介する歴史教育実践の中での学生との会話においても「歴史を学ぶことが久しぶり」や「高校までの勉強の印象」という声が聞かれた。そこには歴史系科目の減少も理由に挙げられるが、学生自身が自主的に歴史に関心を持つような「歴史との出会い」自体が減少しているようにも思われる。暗記科目としての歴史ではなく「現在の自分」と向き合える歴史教育とはいったい何なのか。それらを考えたときに、より自身と関わりのある「地域」を意識した歴史教育実践に至った。

*責任著者 E-mail:tezure@nayoro.ac.jp

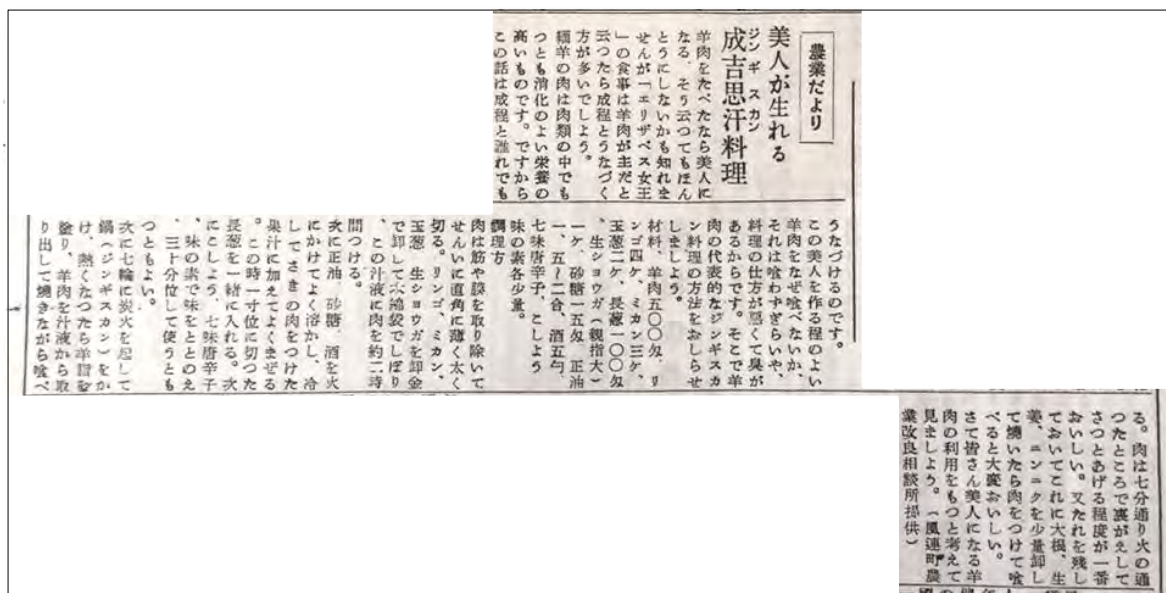
3. 歴史研究会活動内容

4月	初回説明会
	市立博物館学芸員による羊毛の歴史についての講義
5月	1950年代、1960年代の市内地図を使った勉強会
	市内フィールドワーク
6月	1956年『風連新聞』に記載された「成吉思汗」レシピについての検討
	「成吉思汗」再現
7月	「河童祭り」復活のための準備
8月	河童と名寄の関わりについてポスター作製
	河童祭り開催
10月	子ども食堂への参加
12月	フィールドワーク開催へ向けた打ち合わせ
2月	オホーツク地域へのフィールドワーク

上の表は今年度の歴史研究会の実践内容である。今年度の実践は①地域新聞からみる食文化②市内フィールドワーク③地域の祭りと河童文化④オホーツク地域における近代史のフィールドワークの4つになる。

① 地域新聞からみる食文化

本企画は風連新聞（現：北都新聞）に1956（昭和31）年に掲載された「成吉思汗」のレシピを再現するものである【写真1】。食を通して地域の文化について触れ、議論する機会を設けることを目的とした。再現前に事前学習を行い「何故羊肉を用いた料理が掲載されたのか」をテーマとし羊肉活用の背景にある羊文化が名寄にどのように根付いていたのか、名寄市立博物館学芸員の鈴木邦輝氏をお招きし学んだ。新聞記事にレシピが掲載された時期まで名寄周辺には綿羊需要などがあったが、それらの廃羊の活用などが目的としてあったのではないかと、などの意見が学生から挙がった。また「美人が生まれる」と書かれた意味と当時のジェンダー意識などにも議論が広がった。再現当日は市内の精肉店の協力の元、羊肉のさばき方の違いや、戦後の羊肉の普及の流れなどについて学んだ。しかし忠実にレシピを再現したい学生と、なんとなくの雰囲気でも美味しいものを作りたい学生とに分かれてしまった。出来上がった「成吉思汗」は「なんとも言えない味」となってしまったが、「成吉思汗」を囲みながら名寄という極寒の地で如何にして羊と人が関わり合っていたのか普段交わることの少ない他学科や他学年、地域の人々と語りあった。



【写真1 引用：『風連新聞』1956年3月19日掲載】



【写真2 復元当日の様子 2016年6月11日】

② 市内フィールドワーク

市内のフィールドワークについては地域資源の再発見を主な目的として企画した。事前学習では専門職者として「地域を視野に入れた支援」を行うために地域史を理解することが如何に重要かを説明し、1950年代と1960年代の地図、写真そして現在の市内の様子などを検討した。事前学習では1950年代の駅前の様子を写した写真に「こんなに人が多かったなんて信じられない」、「娯楽施設の充実ぶりがすごい」などの声が挙がった²⁾。また「人が集まる理由」として鉄道の充実（宗谷本線、名寄本線、深名線）が意見としてだされた。フィールドワーク当日は鈴木氏の協力により駅舎、駅付近の建築物、商店街などを説明していただいた。「普段意識しないとこんなところ見ない」や「普段何気なく通り過ぎていた倉庫や商店なども歴史的なものなんだと思った」などの感想が学生から挙がった³⁾。



【写真3 市内フィールドワークの風景 2016年5月29日】

③ 地域の祭りと河童文化

本企画は、1961年に市内の浄水場完成に伴い始まり、木造の「河童大明神」に来場者が水をかける「なよろ水まつり」が20年ぶりに「なにいろ工房(黒井理恵代表)」が主催となり復活するため、本研究会が河童の歴史、名寄と河童の関係などについて文献調査、聞き取り調査を行いポスター発表することになった。ポスター作製では国立国会図書館のデジタルアーカイブを利用し文献を収集し、近世から河童がどのような形で文学作品などの物語に登場するのか、またその容姿がどのように描かれてきたのか、その変遷についてまとめ、また柳田國男の『遠野物語』に登場する河童にまつわる物語を分析や「なよろ水まつり」に関わった方々への聞き取り調査を行った。本企画により資料収集方法やインタビュー方法、ポスターでの表現の仕方などについて理解を深めることができた。

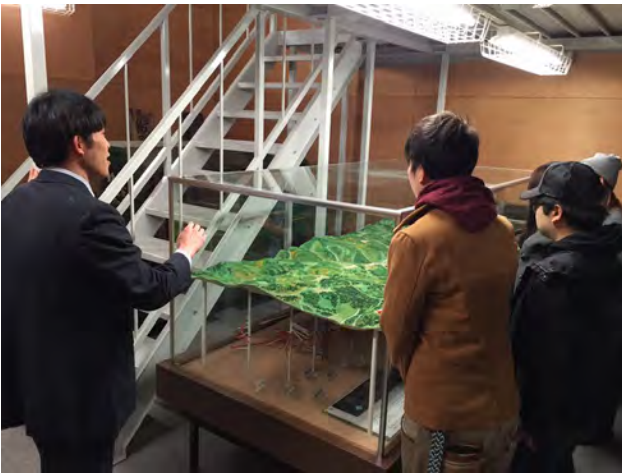


【写真4 なよろ水まつり当日の様子 2016年8月7日】

④ オホーツク地域における近代史のフィールドワーク

研究会メンバーの大半が会福祉学科に所属するため福祉のテーマと関連を持たせ北海道における近

代史がどのようなものであったか、オホーツク（特に鴻之舞鉱山、網走監獄）をフィールドとし調査をおこなった。12月に事前学習として監獄、北海道民衆史関係の資料を輪読し、2月にフィールドワークを行った。1泊2日のフィールドワークには6名が参加し、1日目に紋別市立博物館で鴻之舞鉱山の歴史を学び、鉱山付近を観察した。2日目には移動中に北海道集治監、また1970年代から盛んに行われた民衆史運動について筆者から説明を行いながら博物館網走監獄を見学した。北海道の近代史については若干の知識があったため本企画では主に筆者からの講義とディスカッションを中心に行った。2日目のフィールドワークも終わり帰りの車中で学生に感想を聞いた。ある4年生は「一方から見るとじゃなくて様々な角度からみることが大切だって思った。視方によってその出来事の解釈がかわってくるのが面白かった」と語った⁴⁾。



【写真5 オホーツク地域でのフィールドワーク 2017年2月17,18日】

4. 福祉系大学における歴史教育を考える

本年度の実践で筆者が意識したことは2点ある。

1点目は参加者それぞれが「今の自分との関わり」を感じられる環境をつくることである。

筆者が今回初めて歴史教育実践に取り組んだ際、最も考えさせられたのは、初回研究会時での学生の「歴史は過去のもので今の自分の生活とは関係が薄い」という発言であった。この学生の発言は現在の自分のなかに「歴史を学ぶこと」の位置づけがうまくできていないことを意味していた。

中世ヨーロッパ史研究の阿部謹也は自身の幼少期の修道院との関わりなどから歴史を学ぶことについて「歴史は自分の内面に対応する何かなのであって、自分の内奥と呼応しない歴史を私は理解することはできない」と語る（阿部 1988:203）。「今の自分」を通して歴史をよむその姿勢は歴史を「過去のもの」ではなく「今のもの」に変えることを可能にする。この阿部の記述は上の学生の発言に悩んでいた筆者に大きな示唆を与えてくれた。しかしまだ悩みも残る。はたして何かしらの原体験があり「内奥と呼応する歴史」を持っている者がいったいどれくらいいるのだろうか。

本年度はまず参加者の多くに共通する地域史を対象とし学生の「きっかけづくり」を意識した実践を行った。ここでそれぞれの関心について次年度以降深めていくことにするが、「自分との関わり」を今後も意識していく必要がある。

2点目は「なぜの問い」を参加者たちで共有することだ。「知識としての歴史」だけではなく、その事象があった理由、背景について考えることは、「問題を把握する力」を育む。本研究会に参加した学

生の多くは卒業前に国家試験を受け、4年生になれば学内でテキストを広げ国家試験の勉強をする学生が多くみられる。試験を控えた学生生活には、どうしても「暗記」を必要としてしまう。もちろん一定の援助技術を知識的に「暗記」することは重要である。しかしパターン化された「どうすればよいか」だけを追求するのではなく、「なぜ、このような状況なのか」を考え持つことは援助者に想像力を持たせ、幅広い視野の中での支援を可能にするのではないかと。

以上の2点を意識しながら本年度活動を行ってきたが、1年間の活動を通して悩みは尽きない。しかし学生と教員が共に悩みながら歴史を学んでいくことこそが、「歴史教育」の最も重要な点なのではないかとも思う。

謝辞：本研究会の活動を行うにあたりご協力いただいた名寄市北国博物館鈴木邦輝氏、紋別市立博物館小林健一氏、株式会社東洋肉店東澤壮晃氏、なにいろ工房代表黒井理恵氏にこの場を借りて感謝申し上げます。

註

- 1) 萩野富士夫による『大学「歴史教育」論』(校倉書房：2013)においては大学において如何に歴史教育が語られてきたか、また著書の実践について記述されている。また2016年には木村茂光らによって『大学でまなぶ日本の歴史』(吉川弘文館)が刊行されるなど大学における歴史教育についての議論が活発になっている。
- 2) フィールドノート 2016年5月29日
- 3) 同上
- 4) フィールドノート 2017年2月18日

参考文献

- 阿部謹也(1998)『自分のなかに歴史をよむ』筑摩書房
木村茂光・小山俊樹・戸部良一・深谷幸治編(2016)『大学でまなぶ日本の歴史』吉川弘文館
第4次社会福祉歴史教育委員会(2012)「社会福祉歴史教育に関する委員会(第4次)報告書」『社会事業史研究』第41号
萩野富士夫(2013)『大学「歴史教育」論』校倉書房